

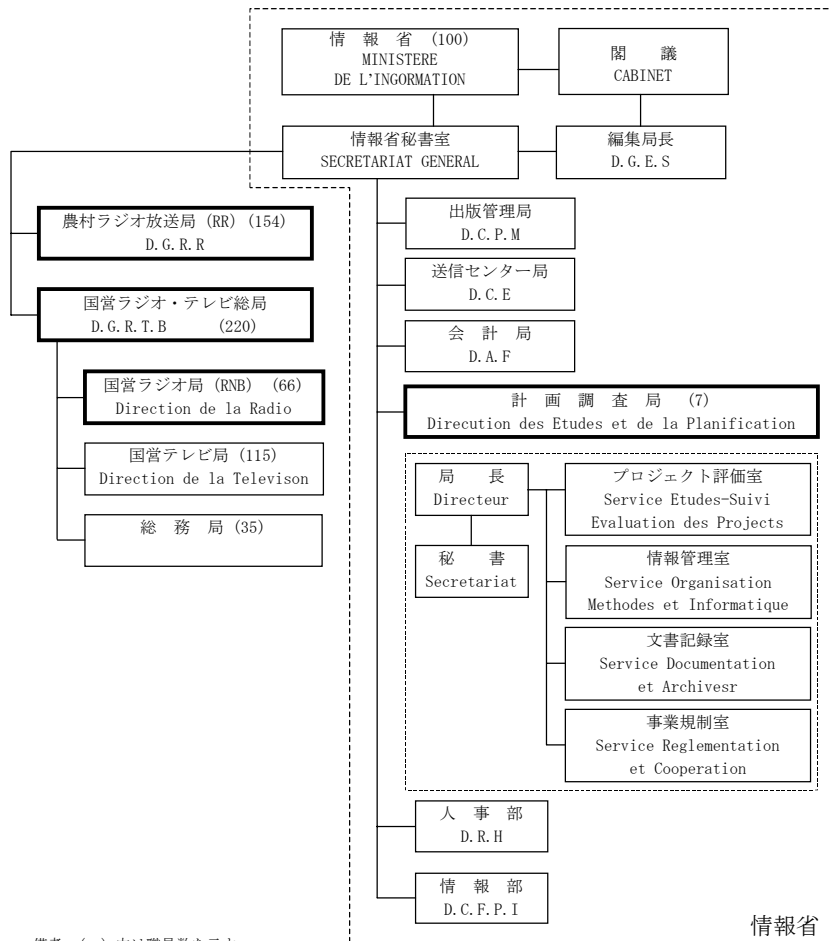
## 第2章 プロジェクトを取り巻く状況

## 第2章 プロジェクトを取り巻く状況

### 2-1 プロジェクトの実施体制

#### 2-1-1 組織・人員

現在の「ブ」国のラジオ放送は、本計画の運営・維持管理担当機関である2つの国営局（RRとRNB）の他、約100の民間あるいは農民組合によるローカル放送局によって成り立っている。RRとRNBの運営に関しては、情報省の監督・指導の下、運営されている。RRは国の公共機関としての機能があり、情報省の予算管理の下で運営されており、地方放送局を含め総職員154名を有している。一方、RNBは、独立採算性で運営されている国営テレビラジオ総局の一部機関として活動しており、総職員は66名となっている。図2.1.1-1に情報省組織図を、また、国営テレビラジオ総局の全体体制図を図2.1.1-2に、RRとRNBの組織図をそれぞれ図2.1.1-3、4に示す。

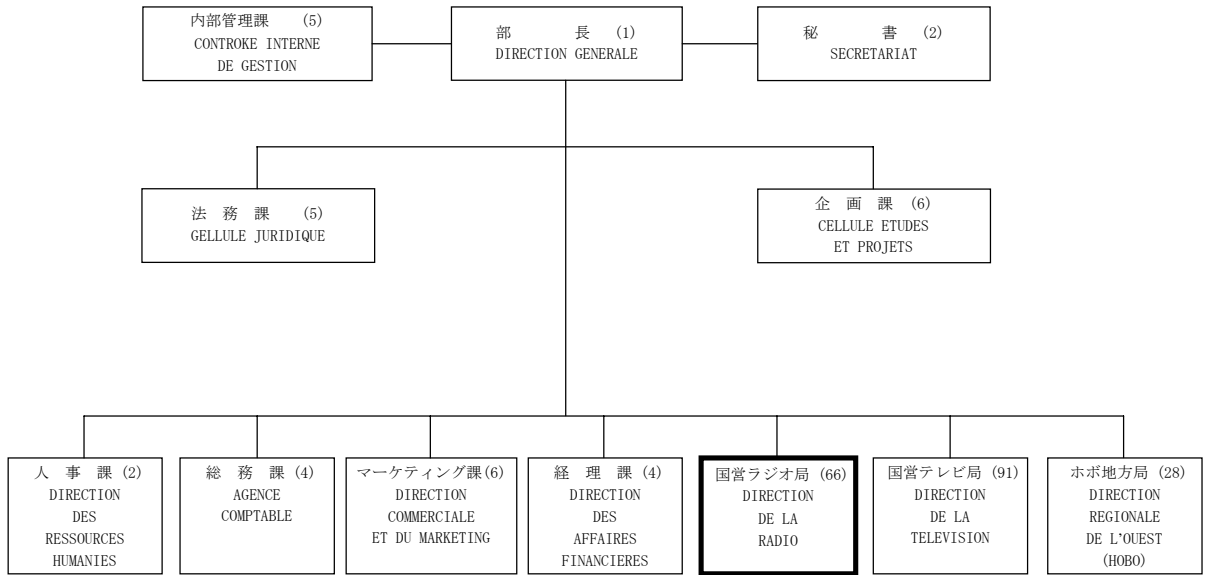


備考：( )内は職員数を示す。  
凡例：□は本プロジェクト担当部所を示す。

D.G.E.S : Direction Generale des Editions SIDWAYA  
 D.G.R.T.B : Direction Generale de la Radiodiffusion Television du Burkina  
 D.G.R.R : Direction General de la Radio Rurale  
 D.C.P.M : Direction chargee du Protocole et de la Presse Ministerielle  
 D.C.E : Direction des Cenires d'Emission  
 D.A.F : Direction des Affaires Financieres  
 D.R.H : Direction des Ressources Humaines  
 D.C.F.P.I : Direction du Centre de Formation professionnelle et d'information

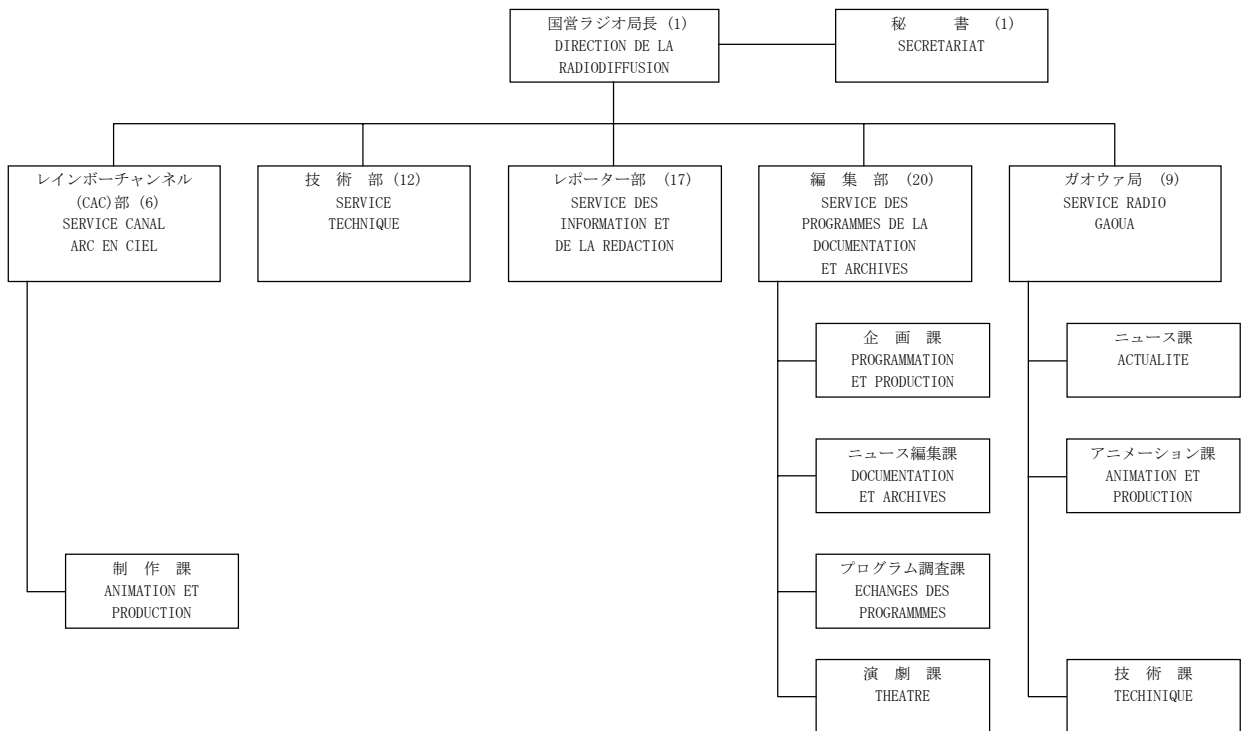
出所：情報省

図 2.1.1-1 情報省組織図



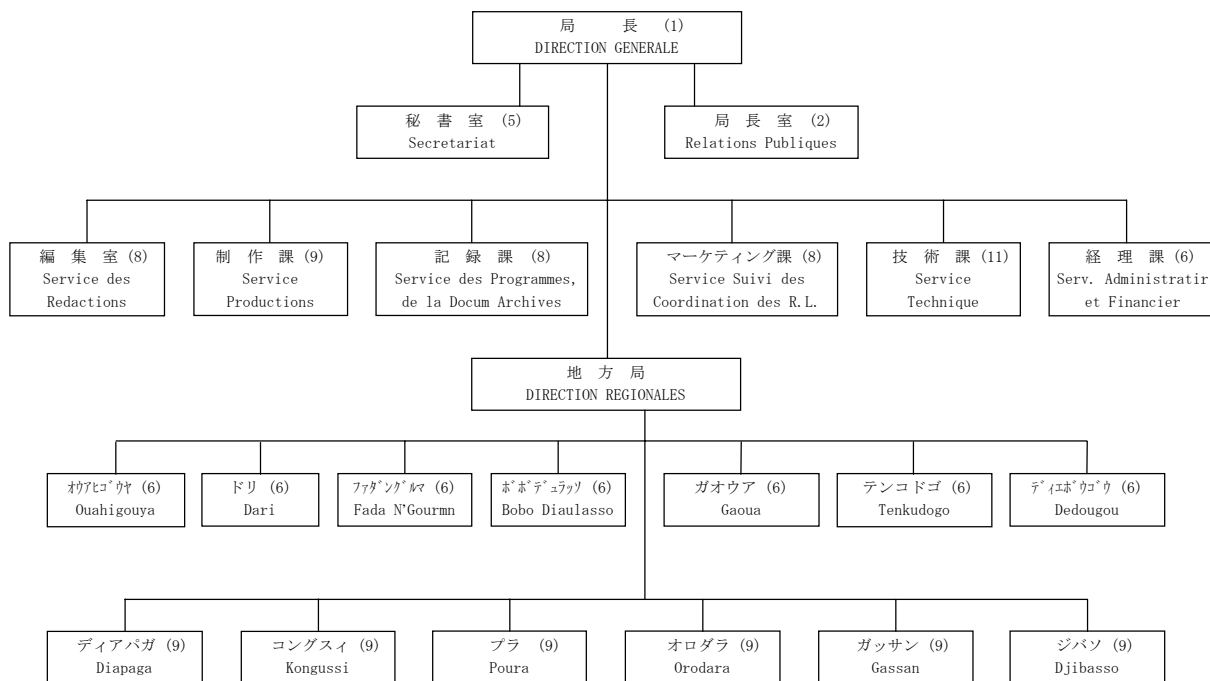
備考： ( )内は職員数を示す。  
出所： OFFICE DE RADIO DIFFUSION ET DE TELEVISION DU BURKINA (RTB) ORGANISATION (2000年)

図 2.1.1- 2 国営ラジオテレビ総局組織図



備考： ( )内は職員数を示す。総職員数は90名。  
出所： OFFICE DE RADIO DIFFUSION ET DE TELEVISION DU BURKINA (RTB) ORGANISATION (2000年)

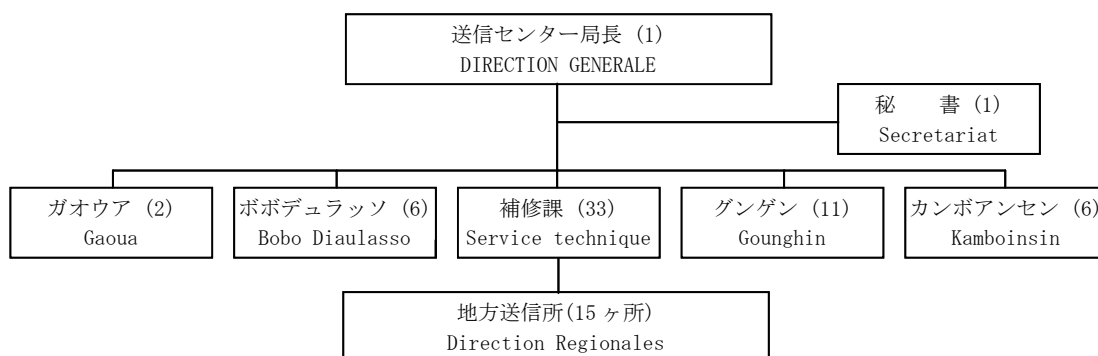
図 2.1.1- 3 国営ラジオテレビ総局の国営ラジオ局(RNB)組織図



備考： ( )内は職員数を示す。総職員数は181名。  
出所： 情報省

図 2.1.1- 4 農民ラジオ局(RR)の組織図

RR と RNB で制作された放送番組は、各地の送信所を経由して配信されるが、同送信所は情報省の送信センター局によって一括管理されている。図 2.1.1-5 に送信センター局組織図を示す。同図に示すとおり、情報省としてはワガドゥグ市内にあるグンゲン送信所およびカンボアンセン送信所の他に主要都市であるボボデュラッソ市とガオウア市に送信所を有し、また、地方 15ヶ所に送信所を設置し、全国放送を行っている。本計画では、RR スタジオに設置する番組伝送装置（以後「STL 装置」と称す）の受信装置 1 式をカンボワンセン送信所に設置する予定であるが、同送信所は 24 時間体制（3 交代制、1 班 2 名構成）で運転員が勤務し送信装置の運営・維持管理を行っている。



備考：( )内は、職員数を示す。  
出所：情報省

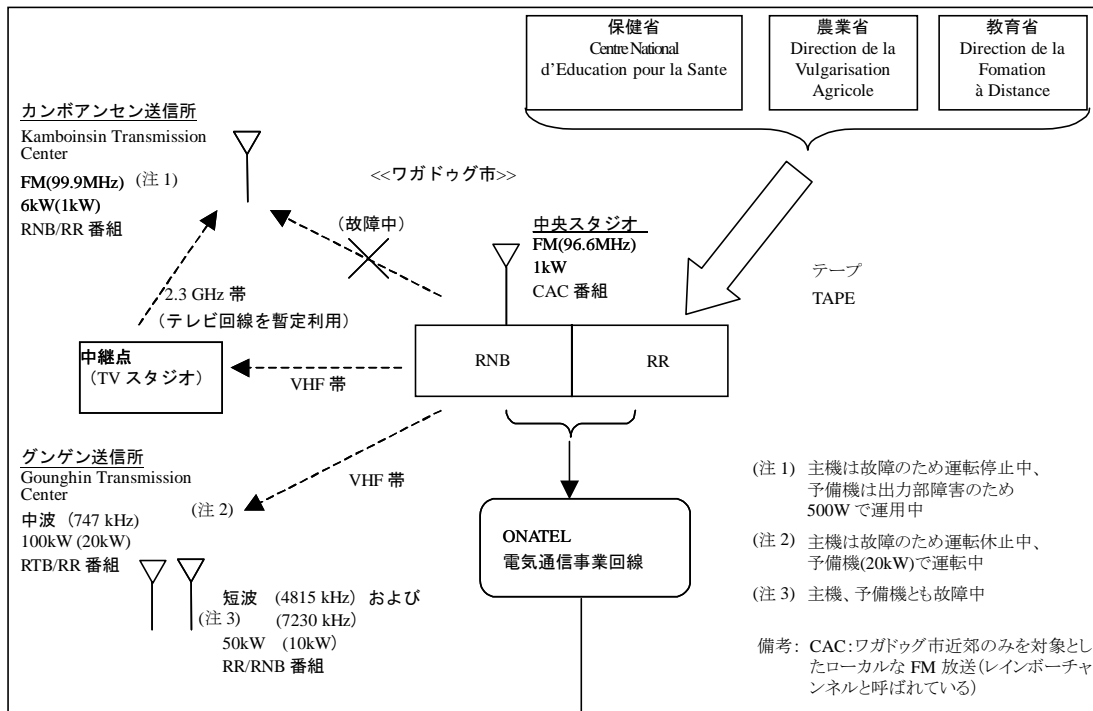
図 2.1.1- 5 送信センター局の組織図

なお、「ブ」国のラジオ放送網を図 2.1.1-6 に示すが、国営放送の RR と RNB の他に、RNB から広告収入を得ているレインボーチャンネル（CAC）を放送している。同 CAC は、首都近郊のみを対象とするローカルな FM 放送である。なお、RR と RNB の放送番組は、短波/中波/FM の 3 つの放送形態によって、全国放送されている。また、地方都市においても、RR または RNB の地方局が設置されている地域では、RR と RNB の本局で制作した番組の他に、地方独自の番組も放送している。

また、表 2.1.1-1 に RR と RNB の設立目的と経緯を示すが、両局は設立目的がそれぞれ異なるものの、RR と RNB 双方の番組制作用機材は老朽化のため機能が低下または停止しており、現在では双方の機材を融通した運営体制で両局の放送業務を行っている。「ブ」国側は、将来的には RR と RNB の放送機能を完全に独立させたいとの希望があるが、現在、明確な事業計画・運営体制計画は確立されていない。本計画では、現在の組織・体制で対応可能な様に、既存の番組制作機能を緊急に回復し、放送業務を継続できる最低限必要な機材を調達する計画であり、既存の組織・体制の変更は必要としない。このため、本計画の実施上、組織・人員に問題はないと判断される。

表 2.1.1- 1 RR・RNB の設立経緯

時期	設立経緯	備考
1959 年	ラジオ オート・ヴォルタとして、後のブルキナ国営ラジオ局（RNB, Radiodiffusion Nationale du Burkina）が設立され、中波および短波放送を開始した。	
1974 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>政府の農村開発の一環として、農村地域に対する農業・保健衛生等の知識の普及を目指すため、地方農村向けの放送局として農村ラジオ局（RR, Radio Rural）が RNB の 1 つの課として設立された。</li> <li>RR の建物は、RNB と同じ敷地内に別個の建物として建設された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>設立当初は、農村地域に 20 人を 1 構成とするラジオクラブという組織を作り、各クラブに対し、政府が無償でラジオを供与し、田植えの時期、耕作の方法、収穫物の販売方法等の情報を提供していた。</li> <li>「ブ」国には、公用語のフランス語のほか、60 の言語があるが、RR では代表的な 16 の言語を用いて放送を行っている。</li> </ul>
1991 年	RNB は、RNB の放送番組とは別に、1991 年から「レインボー・チャンネル（CAC, CANAL Arc-en-ciel）」と呼ばれる FM 放送番組を首都ワガドゥグ市を中心に放送を開始した。	RNB は、レインボーチャンネル（若者向けの番組）を放送することで、広告収入を得ている。
1992 年	RR は、RNB から独立し、RNB と同格の局に格上げされた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>スタジオの機材は独立当時既に老朽化しており、使用できない状態にあった。</li> <li>このため、独立以後は、RR で報道番組等の編集は行っているものの、放送は RNB のスタジオから行っており、RR の放送番組は RNB の放送番組の 1 部として放送している。</li> </ul>
2001 年	RNB は国営テレビ局等と統合され、政府機関として、独立採算性を有する国営ラジオテレビ総局として設立され、同総局内に国営ラジオ局（RNB）が組織される。	国営ラジオ局（RNB）は、国営ラジオテレビ総局の一部門として運営されている。



番組の伝送の流れ

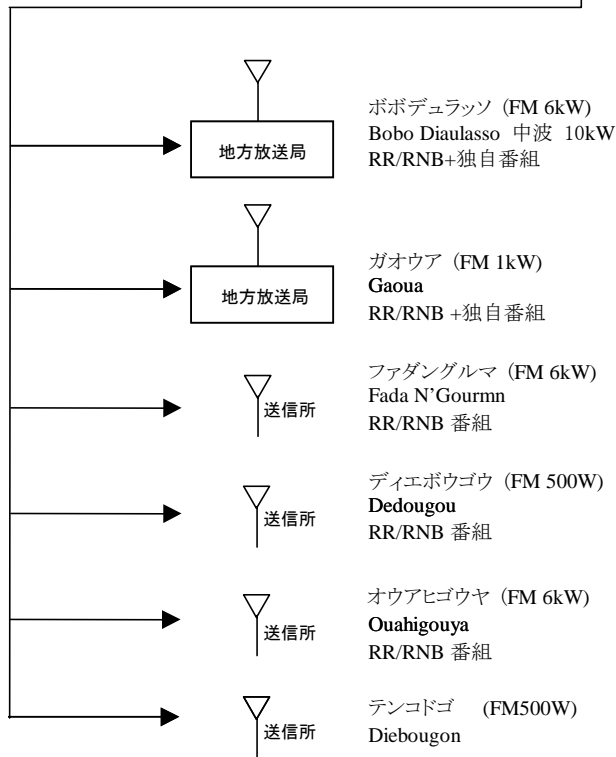


図 2.1.1-6 「ブ」国のラジオ放送網

## 2-1-2 財政・予算

表 2.1.2-1 に 1999 年から 2001 年までのラジオ放送に係る監督省庁の予算推移を示すが、同省は過去 3 年間で、通信・文化省(1999 年)、通信省(2000 年)、情報省(2001 年)と毎年省名と活動内容を変えており、年度ごとの予算費目も一律ではない。同表に示すとおり、1999 年の通信・文化省としての予算(約 36.3 億 FCFA)は、費目の約半分が文化事業的な活動内容となっているが、通信省となった翌年の 2000 年度予算(約 24 億 FCFA)では文化事業費目が削除され、ラジオ・テレビ・報道等メディアの管理業務が活動主体となっており、予算総額も活動内容に合わせ前年比の 60%程度に削減されている。

表 2.1.2-1 ラジオ放送に係る監督省庁の予算推移(1999~2001 年)

[単位: FCFA]

NO.	項目	1999 年	2000 年	2001 年
	(省名)	(通信文化省)	(通信省)	(情報省)
1. 人件費	農村ラジオ放送局(RR)	36,452,000	131,080,000	122,660,000
2. 設備・機材費	農村ラジオ放送局(RR)	17,000,000	18,000,000	12,058,000
3. 財産譲渡費	国営ラジオ放送局(RNB)	337,641,000	544,192,000	520,765,000
4. 資本投資費	グンゲン送信所(短波送信設備の建設)	250,000,000	48,805,000	43,707,000
	国営ラジオ放送局(RNB)(録音用機材調達)	50,000,000	N.A.	N.A.

出所: 経済・財務省

農村ラジオ局(RR)の予算は、上記の情報省予算の人件費と設備機材費に計上されている。この内、人件費はここ最近 2 年間(2000~2001 年)ではほぼ変わらず一定しているが、新規機材およびスペアパーツの調達に充当される設備・機材費は、「ブ」国の外貨不足により、2000 年で 1800 万 FCFA であったが、2001 年では 1200 万 FCFA と減少した。しかしながら、現在審議中の 2002 年度の予算案によると、約 2000 万 FCFA(前年比約 1.7 倍)が計上される予定であり、逼迫した財政事情にも係わらず、本計画実施に対する準備が十分行われていると判断される。

一方、国営ラジオ局(RNB)は、2000 年に制定された法規に基づいて独立採算制で運営されている。RNB の財収は、レインボーチャンネル(CAC)による広告収入、放送料等があるが、表 2.1.2-2 に示すとおり、2001 年度の国庫助成金は RNB 総予算の 41.6%を占めており、独立採算制には程遠い財務状況にある。なお、情報省としては、同助成金を財産譲渡費として計上している。

表 2.1.2-2 国営ラジオ局(RNB)の予算経緯

NO.	項目	2000年		2001年	
		予算(FCFA)	割合(%)	予算(FCFA)	割合(%)
1	独自の収入	939,611,000	63.3	731,520,000	58.4
2	国庫助成金	544,192,000	36.7	520,765,000	41.6
	計(1+2)	1,483,803,000	100	1,252,285,000	100

出所: 情報省

しかしながら、「ブ」国は上記の様に逼迫した財務状況にも係らず、表 2.1.2-1 に示すとおり、自己資金により緊急に必要な資本投資(設備調達)を行っている。本計画に直接関係する資本投資と

しては、RNB の録音用機材の調達(1999 年)、ならびに、老朽化により既存施設の機能が完全に停止しているグンゲン送信所の短波送信設備（100kW）の建設（1999～2001 年）がある。

「ブ」国側は、重要な設備・機材の運営・維持管理に対しては、必要な費用を計上する意向であり、本計画の新設設備に対しても同様に、必要な運営・維持管理費を計上するとしている。このため、本計画の実施上特に問題はないと判断される。



### 2-1-3 技術水準

放送セクターでは、ワガドゥグ市のラジオ・テレビ・出版等のマスコミ学に関する職業訓練校である「情報技術訓練センター」において、基礎過程ならびに、ラジオ科、テレビ科、出版科の専門コースで教育訓練を行っている。同訓練センターは情報省の予算で運営されており、訓練期間は2年である。教育時間はラジオ科（620時間）、テレビ科（500時間）、出版科（720時間）となっており、各科の募集人員は20名程度である。また、フランス・ドイツの技術支援による研修会も開催されており、一般的な教育研修制度は整っている。

更に、「ブ」国側技術者は、独国、仏国等で研修した技術者もおり、一通りの放送機材の運営・維持管理技術を所有している。このため、既設設備は老朽化しており空調設備が稼動していない過酷な運用状況下であるものの、維持管理状態は最低限を維持する状況にある。また、送信所要員についても日常的な修理・補修を行い、歪率計等を使用して出力波形測定も実施しており、放送機材の運営・維持管理に最低限必要な技術力は保有していると考えられる。このため、本計画の実施上特に問題はないと判断される。

## 2-1-4 既存の施設・機材の状況

### (1) 国営ラジオ放送の役割

「ブ」国は代表的な 16 の言語が存在し、公用語であるフランス語の理解者は 10%程度で、成人非識字率は 2000 年で約 23%である。また、国民に教育や農業知識等を伝達する手段は、ラジオ放送のほかテレビ放送や新聞・週刊誌（季刊紙）があるが、約 1000 万の人口に対して日刊紙は 2 万部弱と少なく、その内容は一般的なニュースのみとなっている。テレビ放送は放送カバー率も国土の 30%程度と低く、テレビの購入価格も高いことや、地方の電化率も低いことから、大都市の一部富裕層でのみ利用されているにすぎない。

このため、「ブ」国民のラジオ放送に対する期待は大きく、町では多くの人がラジオ放送に耳を傾けている。また「ブ」国関係者も、生活環境が困窮した国民に対し、ラジオ放送によって農業指導や教育等を行う事により、「明日への希望」を与えたいとしており、RR と RNB から配信された番組を更に、地方の状況に合わせ編集し、地方放送局を通じて放送している。これ等のラジオ放送による教育や啓蒙活動は、「ブ」国で深刻な問題となっている人口の都市集中の緩和等にも貢献している。

### (2) 放送カバレッジ

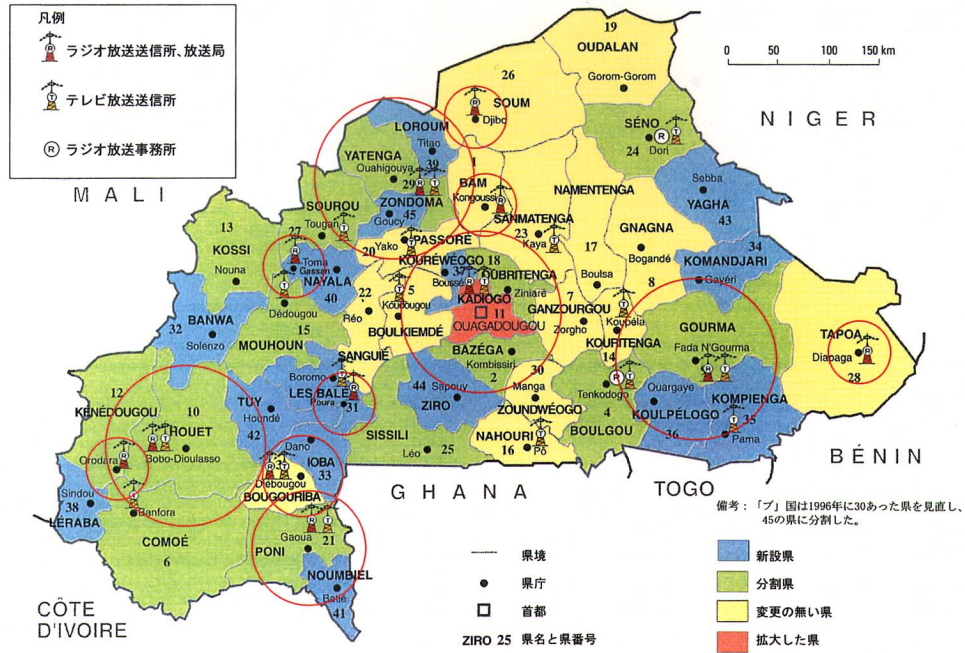
RR と RNB で制作された番組は、スタジオ内の STL 装置によって、ワガドゥグ市北西 12km にあるカンボアンセン送信所および南西 9km にあるグンゲン送信所へ VHF 波で伝送され、全国各地へ放送されている。（但し、現在カンボアンセン向けの STL 装置は故障のため、TV 局のマイクロ波を代用している）また、ボボデュラッソ等の地方局へは、国営の電気通信事業回線を利用して伝送している。

これらの放送網による国営ラジオ局の放送カバレッジ（受信範囲については、詳細なデータは無いが、情報省から提出された各受信範囲を元に作成した）を図 2.1.4-1～2.1.4-3 に示す。なお、同図から算定した周波数ごとの全国土面積に対するカバレッジ範囲（相対範囲）は以下のとおりである。（詳細については、後述の 2-1-4(6)「送信設備」参照）

FM 波放送：全国土の約 41.5%をカバーしている。（約 11.4 万 km<sup>2</sup>）

中波放送：全国土の約 18.8%をカバーしている。（約 5.2 万 km<sup>2</sup>）

短波放送：全国土の 100%をカバーしている。（約 27.4 万 km<sup>2</sup>）



備考：FMによる放送範囲は約113.7km<sup>2</sup>。(全国土面積の約41.5%)

図 2.1.4- 1 国営ラジオ放送(FM波)の全国カバレッジ



備考：中波による放送範囲は約51.5km<sup>2</sup>。(全国土面積の約18.8%)

図 2.1.4- 2 国営ラジオ放送(中波)の全国カバレッジ



備考：短波放送は現在装置故障により、運転を中止しているが、グングン放送センターにて 100kW 送信設備を建設中で、2002 年初旬に完成予定である。短波による放送範囲は、約 27 万 km<sup>2</sup> (全国土面積の 100%)

図 2.1.4-3 国営ラジオ放送(短波)の全国カバレッジ

(3) 番組内容

RR と RNB のラジオ放送番組の時間割合を表 2.1.4-1 に示すが、ニュース、教育に関する割合が多い。なお、RR と RNB では、「ブ」国政府の進める国営ラジオ放送を利用した農業、教育および医療活動活性化政策の一環として、保健省、初等教育識字省、および農業省が制作した活動番組（またはメッセージ）の放送を行っている。これらの活動状況は各省ごとに様々であるが、保健省では、音楽番組の中に AIDS 防止キャンペーン等のスポット・メッセージを入れた番組を放送している。農業省では毎朝 5 時半から始まるジューラ語による農村番組（約 30 分間）を始め、夕刻放送のモーレ語による村落討論等の地方現地語番組を中心に 1 日約 3 時間程度の番組を放送している。また、初等教育識字省は、木曜日と金曜日の夜に 30 分間の定期的な教育番組等を放送している。

表 2.1.4-1 ラジオ放送番組内容

番組	割合 (%)	備考
ニュース	20.00	
対談	12.85	
教育・啓蒙	23.08	
女性向け放送	2.93	
子供向け放送	6.61	
宗教	1.88	
音楽	10.44	
スポーツ	4.24	
娯楽	3.97	
広告	14.00	RNB に適用
合計	100.00	

出所：RR と RNB 番組表（2000 年 12 月）

(4) スタジオ既存施設・機材の現状と問題点

「ブ」国の国営ラジオ放送は、RR と RNB の 2 局が同一敷地内にそれぞれスタジオ施設を有し地下埋設の自営回線で結ばれており相互に機材・設備を利用して放送を実施している。

1) RR スタジオ・副調整室の概要

RNB と同一敷地内に農村向け放送番組を担当する RR のスタジオが設置されている。1974 年にドイツの協力により建設されたもので、建物の外観および内部とも本格的な設計が見受けられる。スタジオⅠ・Ⅱ・Ⅲに各副調整室が付加されている他、テープ編集室、ライブラリおよび保守用工作室が設置されている。

スタジオに配備されている機材のうち、1998 年に更新したスタジオⅡおよびⅢのスイス製音声調整卓および同 6 ミリテープレコーダーを除いて、他機材は建設当時のまま更新されていない。このため、ほとんどの機材が運用停止の状況にある。但し、局舎に関してはスタジオの内装が、全面アルミ製有穴ボード張りでも本格的な音響処理が施されており、維持管理状態も良く、また入り口の防音扉の機能も支障がない等、生放送・録音ともに使用可能な状態となっている。

また、RR 局舎の集中型空調装置は、昨年まで辛うじて運転されていたが、フロンガスを冷媒とするシステムの補修部品が入手困難となり運転不能となっている。表 2.1.4-2 に RR 施設の現状と問題点を示す。

表 2.1.4-2 RR 設備の現状と問題点

スタジオ・副調整室	機材の現状	問題点
スタジオⅠおよび副調整室Ⅰ (Studio-I・Regie-I)	<p>(1) 副調整室</p> <p>① ニュース放送収録用副調整室であり、平面は約 9m<sup>2</sup>、天井高約 3.5m となっている。</p> <p>② 主要な機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツ（既に廃業した AEB 社）製入力 10・出力 2 の音声調整卓 1 台</li> <li>・同レコードプレーヤー 2 台</li> <li>・鉄板式エコーマシーン・リモコン 1 台</li> <li>・スイス製 6 ミリテープレコーダー 3 台</li> </ul> <p>いずれも故障のまま使用不能の状態で置かれている。</p> <p>(2) スタジオ</p> <p>① 2 名程度の対談の収録が可能なアナウンスブースであり、平面は約 9m<sup>2</sup>・天井高約 3.5m となっている。案内壁はブロック+グラスウール+空気層+有孔メタル板板構造により、吸音効果を上げている。</p> <p>② 主要機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・送り返し用スピーカー 2 台</li> <li>・ダイナミックマイクロホン 2 個（卓上スタンドつき）</li> <li>・マイクロホン端子 6 個（ドイツ工業規格 DIN 3P 壁面ダクト取付け）</li> <li>・アナウンサー用マイク入り切り装置 1 台</li> <li>・子時計 1 台（停止中）</li> <li>・机 1 台</li> <li>・椅子 2 脚等</li> </ul> <p>副調整室の機能が停止しているため放置されている状況にある。</p>	<p>① 空調の故障からスタジオと副調整室の気温は 32℃以上であり、機材への悪影響がある。</p> <p>② 主要機材は、故障のため放置されている。機材の部品はすでに生産していないため、故障機材は修理不能である。このため、番組の録音、制作、編集は中断しており、職員の意欲も十分発揮できず、番組制作に支障が出ている。</p>

スタジオ・副調整室	機材の現状	問題点
スタジオⅡおよび副調整室Ⅱ (Studio-Ⅱ・Regie-Ⅱ)	<p><u>(1) 副調整室</u></p> <p>① ニュース放送用の副調整室であり、平面は約12m<sup>2</sup>、天井高約3.5mとなっている。また、STL用装置が設置されている。</p> <p>② 主要機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1998年に更新したスイス製の入力24・出力4音声調整卓1台</li> <li>・ 同6ミリテープレコーダー2台</li> <li>・ カセットテープレコーダー1台</li> </ul> <p>③ CDMマスターコントロール（主調整室）機能として、RNB間の地下埋設専用回線4回線および電話公社（ONATEL）運営の中継専用線3回線が収納架に直接（架下端子はない状態で）立ち上げてある。このうち1回線は、グンゲン親局送信所向けの番組送り出し用（STL）として常時使用されている。</p> <p>④ 機材収納架（ラック）3架内にスタジオ間音声分配ジャック盤1面・中継線音質補正装置2台・音声分配増幅器2台・放送波監視用全波受信機2台・音量制限増幅器2台等が、いずれも故障したままの状態にある。</p> <p><u>(2) スタジオ</u></p> <p>① アナウンスブースの平面は、約9m<sup>2</sup>・天井高約3.5mであり2名程度の対談の収録が可能である。案内壁はスタジオⅠと同様。</p> <p>② 主要な機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スタジオ内壁面ダクトにマイクロホン端子函（DIN規格品種）が取付けられている他に、ダイナミックマイクロホン2個（卓上スタンドつき）</li> <li>・ 送り返し用スピーカー2台</li> <li>・ アナウンサー用マイク入り切り装置1台</li> <li>・ 子時計（停止中）1台</li> <li>・ 机1台</li> <li>・ 椅子2脚等</li> </ul> <p><u>(3) スタジオ～送信所間 番組伝送回線（STL）の状況</u></p> <p>1) RRスタジオグンゲン送信所</p> <p>国営ラジオスタジオとグンゲン送信所への番組伝送回線は、VHF FM波(88.464MHz)を利用し、伝送している。</p> <p>2) RRスタジオカンボアンセン送信所</p> <p>国営ラジオ局とカンボアンセン送信所間もグンゲン送信所と同様の伝送（VHF FM波99.816MHz）を考慮したようであるが、電波品質が確保できず、現在はグンゲン送信所向けの電波を近くのテレビ局で受信し、テレビ用の伝送装置(2.286GHz)の音声1チャンネルを使用して伝送している。</p> <p>3) その他</p> <p>グンゲン送信所は短波送信機および中波送信機を有しており、「プ」国側としては、将来的には国内放送と国際放送を実施するとの意向がある。</p>	前掲

スタジオ・副調整室	機材の現状	問題点
スタジオⅢおよび副調整室Ⅲ (Studio-Ⅲ・Regie-Ⅲ)	<p><u>(1) 副調整室</u></p> <p>① 約 9m<sup>2</sup>の平面で天井高も約 3.5m と音楽番組制作用副調整室としては手狭であるが、機材更新および空調の修復によって流用可能である。</p> <p>② 主要な機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1999 年に取得したスイス製の入力 24・出力 4 チャンネル音声調整卓 1 台</li> <li>・ 同 6 ミリテープレコーダー 2 台</li> <li>・ ステレオモニタースピーカー左右 1 台</li> <li>・ 同アンプ 1 台</li> </ul> <p><u>(2) スタジオ</u></p> <p>① 約 60m<sup>2</sup>の広い平面を有しかつ天井高も約 4.2m と高く設計されているので、中編成程度の器楽演奏・コーラス・ドラマ等の番組制作が可能である。案内壁はスタジオⅠと同様。</p> <p>② スタジオ内壁面ダクトに、マイクロホン端子函（ドイツ工業規格 DIN 3P 12+10）2ヶ所計 22 個が取付けられている他、ステレオ送り返しスピーカー左右 1 台・子時計（停止中）2 台が設置されている。</p>	前掲
編集室Ⅰ (Montage-Ⅰ)	<p>① テープライブラリーに隣接している編集室で、平面は約 5m<sup>2</sup>、天井高約 3.5m となっている。</p> <p>② 主要な機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スタジオ建設時に配備されたドイツ製の入力 4・出力 1 チャンネルの音声調整卓 1 台</li> <li>・ 同レコードプレーヤー 2 台</li> <li>・ スイス製 6 ミリテープレコーダー 3 台</li> </ul> <p>いずれも耐用年数を遥かに超えており、使用不能の状況である。</p> <p>③ 機材の更新後は、保管中の民族音楽資料テープ（約 3 万本）の CD 化を図りたいとの意向がある。</p>	前掲
編集室Ⅱ (Montage-Ⅱ)	<p>① 一人用（約 4m<sup>2</sup>）のアナウンスブースが付属している編集室で、平面は約 8m<sup>2</sup>、天井高約 3.5m となっている。</p> <p>② 主要な機材は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ドイツ製の入力 5・出力 1 チャンネル音声調整卓 1 台</li> <li>・ 同レコードプレーヤー 2 台</li> <li>・ スイス製 6 ミリテープレコーダー 3 台</li> </ul> <p>いずれもスタジオ建設時の機材で、耐用年数を遥かに超えているため使用不能の状況である。</p> <p>③ 編集室側の平面も約 8m<sup>2</sup>と狭いため音声調整卓等の機種を小型の機材にする配慮が必要である。マイク回線は、2 回線がある。</p>	前掲
RR 空調設備	<p>① RR の空調設備は集中型空調設備であり全室にダクトが設置されている。</p> <p>② 本体機械は、送風機が RR 局舎北側に隣接して設置され、別棟に冷却機本体が設置されている。</p> <p>③ 本体機械は 1974 年に製造されたフランス製冷却機および米国製（送風機）であるが、老朽化のため故障が頻発し、またフロン冷媒のため製品はすでに生産を中止した装置である。</p> <p>④ RR 各部屋に冷気を送るダクトは、流用可能と思われる。</p>	空調設備の故障により各室の日中温度は 36℃にもなり、作業環境を悪化させ、更に機材寿命を低下させている。



(4)-2 RNB スタジオ・副調整室の概要

スタジオの建造は、約 40 年以上前の 1959 年、フランスによるもので、「ブ」国独立直前の時期である。現在稼働中のスタジオ施設は、A・B・C・D スタジオの 4 ヶ所であり、それぞれにレジューと呼ばれる副調整室（サブコントロールルーム）が付属している。他に CDM と呼ばれる主調整室（マスターコントロールルーム）の設備がある。

この他に、スタジオ E があるがテレビ用スタジオ施設として使用されていたが、12 年以上前から使用されていない。音響的な壁面内装処理等がまったく施されておらず、且つ天井部分にはキャットウォークと呼ばれる照明灯具等の調整用に設けられた鉄骨組みの通路がそのまま残されている。同スタジオ用副調整室（映像・音声・照明等の操作室）は、2 階にあり 1 階からの通路は人が一人やっと通れる程度の極めて狭い螺旋階段となっている。また、1・2 階各出入り口の防音扉の欠落もしくは損傷が特に著しく、床面タイルが剥がれて散乱している等、音楽用スタジオとして利用する場合には建屋の大規模な改修工事が必要となる。

表 2.1.4-3 に RNB 施設の現状と問題点を示す。

表 2.1.4-3 RNB 設備の現状と問題点

スタジオ・副調整室	機材の現状	問題点
スタジオ A および副調整室 A (Studio-A・Regie-A)	<p>(1) 副調整室</p> <p>① 現在稼働中の 4 スタジオのうち、スタジオ A は「CAC」と呼ばれる FM ステレオ放送用の生送出スタジオとして使用されている。平面は約 23m<sup>2</sup>で、天井高約 4m となっている。</p> <p>② 主な機材は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 韓国製の入力 16・出力 2 チャンネル音声調整卓（ミキサー）1 台</li> <li>・ 日本製 6 ミリオープンリールテープレコーダー（以下 6 ミリ TR と略す）1 台</li> <li>・ 日本製カセットテープレコーダー 2 台</li> <li>・ 電話レポート用送受話装置 1 台</li> <li>・ エコー付加装置 1 台</li> <li>・ スイス製 CD プレーヤー 2 台</li> <li>・ ドイツ製レコードプレーヤー 2 台</li> <li>・ ステレオモニタースピーカー左右各 1 台</li> <li>・ ステレオモニターアンプ 1 台</li> <li>・ 放送波確認用のラジオカセット 1 台</li> <li>・ その他</li> </ul> <p>(2) スタジオ</p> <p>スタジオ内には、3 ヶ所計 11 個 (3+2+6) のマイクロホン接続端子（ドイツ工業規格 DIN 3P）がある。平面は約 52m<sup>2</sup>で天井高は 4m となっている。壁面は腰高位置まで木材張りであり、それより上は吸音テックス張りで、天井部分は別材質の吸音テックス張りの本格的な音響設計スタジオとなっている。また、吸音と拡散用のレゾネーターが壁面に数個取付けられており、音響効果を上げている。</p>	<p>① 現用使用中の機材の一部は 1998 年頃調達した韓国製の民生機種であり、放送規格の「連続使用」規定に適合しない。したがって、その性能面・耐久性が劣り信頼性が低い。</p> <p>② ドイツ製レコードプレーヤー等の EBU（ヨーロッパ放送連合）規格に準拠した機種も見受けられるが、径時変化による性能劣化、ならびに製造者による部品保有義務期限をはるかに越えているため、故障したまま使用不能の状態となっている。</p> <p>③ スタジオ建物全体の中央制御型空調設備の故障により、現在、副調整室には壁面取付け型個別空調機（韓国製）を設置し、温度調節を図っているが機材性能が悪く故障が多発している。室温は 31℃ を超えている。</p> <p>④ スタジオ内はかなり広い平面を有しており、木製の衝立が建ててあるものの薄い板状の材質であるため、音響効果は、余り期待できない。既製品の吸音板に置き換えることが望ましい。</p>



スタジオ・副調整室	機材の現状	問題点
	<p>(3) その他</p> <p>CAC の FM 局は、首都近郊の若者向けの音楽を中心とした専門局の色合いが強い放送局である。送信所はスタジオ敷地内の鉄塔横にあるが、CDM から同送信所まで自営の地下埋設回線（線路長約 100m）で結び、番組を送り出しイタリア製送信機（1kW）で放送を実施している。</p>	
<p>スタジオ B および副調整室 B (Studio-B・Regie-B)</p>	<p>(1) 副調整室</p> <p>① 通常は番組収録および編集室として使用されているが、同時に CAC の FM ステレオ放送用スタジオ A 不具合発生時の緊急避難送出スタジオとしての機能も有している。平面は約 44m<sup>2</sup> で天井高は約 4m である。</p> <p>② 機材の構成は、副調整室 A と同様。</p> <p>(2) スタジオ</p> <p>① スタジオには、アナウンスブースが付属しており、3 回線のマイクロホン端子函があり、3 名程度の座談番組等の制作も可能である。平面は約 18m<sup>2</sup> で天井高は約 4m である。壁面と天井部分の材料は、スタジオ A と同様である。</p> <p>② また、隣接するスタジオ A との間に 6 回線のマイクロホン接続用のいわゆる渡り回線が設置されている。前述のとおり CAC 放送局の緊急避難的な運用ならびにスタジオの有効利用という点を考慮すれば、編集室としての機能更新に加えて、生番組送出および録音番組制作スタジオとしての機材の設置が望まれる。</p>	<p>① 空調の故障からスタジオと副調整室の日中の気温は 32℃ 以上であり機材への悪影響が危惧され早急な改善が必要である。</p> <p>② 機材の保守用部品等は、製造業者の部品保有義務年限を大幅に越えているため調達不可能な時期に達している。</p> <p>③ 副調整室 B は、他の副調整室に比べてかなり広い平面を有しているため、スタジオ A 内と同様に室内に木製衝立風のものが建ててあるが、音響的な意味での吸音・拡散といった見地からは不十分であり適当でない。より音響効果が上がる材質の仕切り吸音板等の設置が望まれる。</p>
<p>スタジオ C および副調整室 C (Studio-C・Regie-C)</p>	<p>(1) 副調整室</p> <p>① RR と RNB 双方の生番組送出および録音番組制作作用に使用されている。平面は約 28m<sup>2</sup> で天井高は約 4m である。</p> <p>② 現用中の機材は、1992～1996 年に設置されたもので EBU（ヨーロッパ放送連合）放送規格に準拠したスイス製入力 20・グループ 4・出力 2 チャンネル音声調整卓 1 台を中心に以下のとおりとなっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スイス製カセットテープレコーダー 2 台</li> <li>・ 同 CD プレーヤー 2 台</li> <li>・ 同スイス製電話レポート送受話装置 1 台</li> <li>・ 同 6 ミリテープレコーダー 2 台</li> <li>・ 日本製 MD プレーヤー 1 台</li> <li>・ 同エコー付加装置 1 台</li> <li>・ ドイツ製レコードプレーヤー 2 台</li> <li>・ 8トラックカセットプレーヤー 2 台</li> <li>・ ステレオモニタースピーカー左右各 1 台</li> <li>・ ステレオモニター用アンプ 1 台</li> <li>・ スタジオ内送り返し用ステレオスピーカー左右各 1 台</li> <li>・ 同アンプ 1 台</li> </ul> <p>(2) スタジオ</p> <p>① 平面は約 24m<sup>2</sup> で天井高は約 4m である。壁面と天井部分の材料は、スタジオ A と同様である。</p> <p>② 単一指向性型ダイナミックマイクロホン 3 個</p>	<p>① 空調の故障からスタジオと副調整室の日中の気温は 32℃ 以上であり機材への悪影響が危惧され早急な改善が必要である。</p> <p>② 機材の保守用部品等は、製造業者の部品保有義務年限を大幅に越えているため調達不可能な時期に達している。</p>

スタジオ・副調整室	機材の現状	問題点
スタジオDおよび副調整室D (Studio-D・Regie-D)	<p><u>(1) 副調整室</u></p> <p>生番組送出および録音番組制作に使用している。</p> <p>① 平面は、約 21m<sup>2</sup>で天井高は約 4m である。</p> <p>② 使用中の機材は、EBU（ヨーロッパ放送連合）規格に準拠したスイス製入力 24・グループ 8・出力 4 チャンネルの音声調整卓 1 台であるが、その他の機材はスタジオCとまったく同一の機材構成で 1995～1996 年に設置されている。同機材を使用して、生番組放送と録音番組制作を適宜使い分けて運用している。</p> <p>③ 機材の状況は他と同様であるが、放送機材類の日本における法定償却基準は 6 年と定められており、通常 10 年程度で更新（民間放送局で実施中の平均値）されていることに鑑みても当該機材は経時変化による性能低下により、残余の耐用年数はそれ程長くはないと推測される。</p> <p><u>(2) スタジオ</u></p> <p>平面は約 28m<sup>2</sup>で天井高は約 4m である。壁面と天井部分の材料は、スタジオCと同様。</p>	<p>① 空調の故障からスタジオと副調整室の日中の気温は 32℃以上であり機材への悪影響が危惧され早急な改善が必要である。</p> <p>② 機材の保守用部品等は、製造業者の部品保有義務年限を大幅に越えているため調達不可能な時期に達している。</p>
主調整室 (CDM)	<p><u>(1) CDM 室</u></p> <p>① CDM では、スタジオ制作番組の送信所への送り出し (STL)・スタジオの選択・切替え・放送波監視 (エアーモニター) と平行して、中継回線 (中継車・通信省運営専用回線・同電話回線等) の入中継回線のスタジオへの分配、ならびに通信省運営の専用回線による地方局・中継車・レポーター等への送り回線の選択切替え・監視等を主な業務として行っている。このため、本来 24 時間対応のラジオ局としての中心的な機能を有している。</p> <p>② 平面は約 33m<sup>2</sup>で天井高は約 4m である。</p> <p><u>(2) CDM 装置への入力および出力回線の状況</u></p> <p>① 自営の無線回線を使用する中継車以外に、国营電話会社 (ONATEL) 回線による入中継専用恒久線が、国会・首相官邸・サッカー競技場等計 5 回線ある。また恒久回線以外に 5 回線の臨時専用線も用意されている。</p> <p>② 地方局等への中継回線も同様に、ONATEL の専用回線で 10 回線が接続されており、350km 西方にある第二の都市ボボデュラッソをはじめ 9ヶ所の地方局へ番組を配信している。</p> <p><u>(3) RR と RNB 連絡線</u></p> <p>① 同一敷地内にある RR スタジオ建物との間 (線路長約 150m) に 4 回線の地下埋設の自営専用回線があり、RR と RNB の双方向の番組素材伝送に使用されている。現在、このうちの 1 回線は RNB の CDM から RR の CDM を経由して、親局であるグンゲン送信所およびカンボアンセン送信所への番組送出回線 (STL) として常時使用している。</p>	<p>① 空調の故障からスタジオと副調整室の日中の気温は 32℃以上であり機材への悪影響が危惧され早急な改善が必要である。</p> <p>② 機材の保守用部品等は、製造業者の部品保有義務年限を大幅に越えているため調達不可能な時期に達している。</p>
RNB 空調装置	<p>① RNB 内のスタジオ E の 2 階部分に送風機があり、屋上に冷却機本体が設置されている。RNB は北側建物と、増築部分の南側建物に空調設備の系統が分かれており、南側部分は日本製装置が収められているが、15 年以上動作していない。</p> <p>② また北側部分には米国製空調機 2 台が設置されているが 30 年以上を経過しており、同様に交換部品の消耗のため故障の状況である。</p>	<p>① 現在の中央集中形空調装置は、コンプレッサー等、多数の部品の交換が必要な状況であるが、フロンを使用した製品である。</p> <p>② また、各部屋に冷気を送るダクトの汚れや損傷が大きく修理には大掛かりな改修が必要であることから、いずれも利用が不可能である。</p>

(5) 非常用発電設備

RR と RNB 局舎の別棟に非常用発電機（200kVA、ドイツ製、1974 年）が設置されている。雨期の雷雨時には週 2～3 回 15 分程度の停電が頻発するが、当該発電機の運転で両局に対し電力供給を行っている。

(6) 送信設備

送信装置と放送局のシステムシステムを図 2.1.4-4 に示す。同図に示すように、中波、短波、FM それぞれの送信設備の状況は以下の通りであるが、2001 年 10 月現在運用されている送信機は、中波送信機：1 台、短波送信機：なし、FM 送信機 1 台（CAC 放送を省く）であり、運転されている装置は、本来予備（スタンバイ側）の送信機である。短波放送については現在、新設 100kW 送信機が据付工事中であり、2002 年 2 月に完成・供用開始予定。なお、中波送信機のうち、1 台は設置後 26 年を経過しており、復旧は出来ないと考えられる。

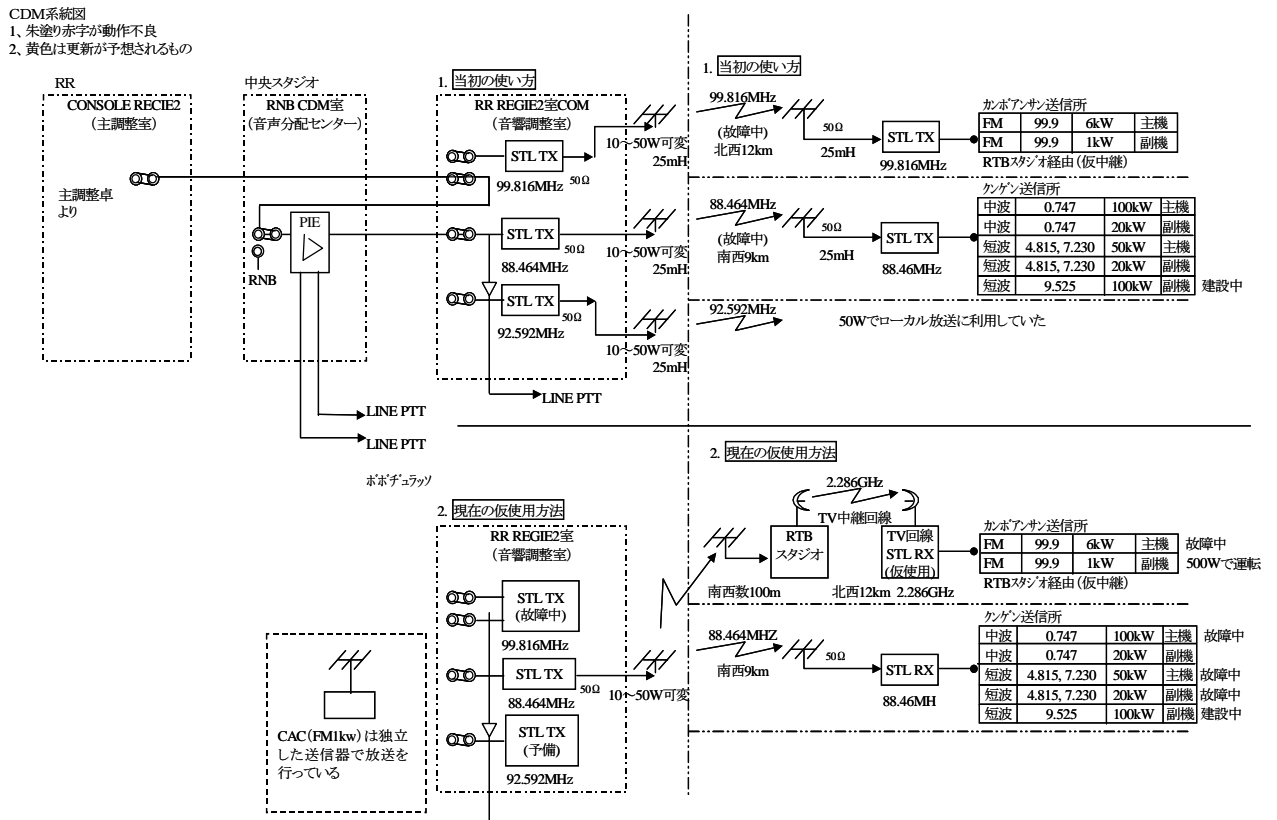


図 2.1.4-4 CDM 系統図(2001 年 10 月現在)

以下にカボアンセン送信所、クンゲン送信所各放送波の現状を示す。なお、表 2.1.4-4 に RR と RNB のラジオ放送網（2001 年 10 月現在）を示す。

1) 中波放送

RR と RNB で制作された番組は、番組伝送回線（STL）により、クンゲン送信所に伝送され、同送信所より周波数 774kHz で放送している。同送信所にはドイツ製 100kW 送信機（1974 年製）とドイ

ツ製 20kW 送信機（1992 年製）が設置されているが、100kW 送信機は 6 年前から部品製造が中止している。このため中波放送は 20kW 送信機の単独運転となっている。

但し、同送信機は、出力メーター回路が不良であるが、局員からのヒアリングによると、各部の動作電圧と動作電流が正常であるので、出力は保たれている。なお、同送信所では、定時的にメータリングのデータを記録しており、保守体制は良好である。

## 2) 短波放送

短波放送は、グンゲン送信所から中波放送と同一番組を放送することになっているが、現在、2 台ある送信機（ドイツ製 50kW 送信機（1985 年製）、ユーゴスラビア製 20kW 送信機、（1989 年製））ともに故障中である。前者は故障・修理を繰り返してきたが、本年 8 月に故障して以来、機能は停止している。また、後者は 1 年前から部品が入手出来ず、停止したままとなっている。このため、現在短波放送は実施されていない。

なお、「ブ」国は短波放送の緊急復旧のため、1999 年から自国予算でグンゲン送信所内に送信設備を新設している。新設機材はクロアチア製 100kW 送信機で、新築局舎に据付工事中である。また、アンテナも建設工事中である。局員によれば、2002 年 2 月に完成し、その後、新送信機での国際放送、旧送信機で国内放送をする予定であるとしている。

## 3) FM 放送

RR と RNB で制作された番組は STL 回線により、カンボアンサン送信所に伝送され、同送信所より周波数 99.9MHz で放送している。同送信所ではイタリア製の 6kW 送信機（1997 年製）と 1kW 送信機（1989 年製）の 2 台の送信機で運用している。しかしながら、2001 年 10 月時点では、6kW 送信機は出力部（アンテナ・フィーダーを含む）の異常のため、出力を上げるとスパークするとのことで、運転を中止し、予備の 1kW 送信機で放送している。ただし、同 1kW 送信機も出力合成部分の不良により 100%の出力（1kW）を出せず、バイパスして 500Wの出力で運転している。

なお、6kW 送信機は、ステレオ変調器を内蔵しており、信号源があればステレオ放送可能であるが、1kW 送信機はステレオ変調器を内蔵しておらず、ステレオ放送を行うにはステレオ変調器を追加する必要がある。現在は伝送される信号が 1 チャンネルであるので、モノラル放送である。

当該送信所での日常点検はメータリングのみであるが、2 週間に 1 度、定期的にユニットのカバーを外して空気を吹きつけ、ほこり除去等の作業を行っている。

この他、FM 放送は RR と RNB の番組とは独立して CAC（CANAL Arc-en-Ciel、レインボーチャンネル）と呼ばれる番組の放送を RR と RNB の敷地内のアンテナから、周波数 96.6MHz で、イタリア製の 1kW 送信機（1991 年製）を使用してステレオ放送を実施している。2001 年 10 月時点で、出力 800W と多少減力していたが、その他特に問題は見受けられない。点検はメータリングのみで、2 週に 1 度カンボアンサン送信所から技術者が点検に来ている。

表 2.1.4- 4 RR・RNB ラジオ放送網(2001 年 10 月現在)

地名 [ ]は送信所名	設置年	出力	周波数		受信範囲	運転・故障状況
① ボボデュラソ	1979	6 kW	89.8 MHz	FM	80 km	○
② ボボデュラソ	1979	10 kW	0.1008 MHz	中波	80 km	○
③ ディアバガ		0.100 kW	95.8 MHz	FM	30 km	○
④ ジバソ		0.100 kW	94.6 MHz	FM	30 km	○
⑤ ファダングルマ	1979	6 kW	89.2 MHz	FM	80 km	○
⑥ ガオウア	1985/1990	1 kW	90.1 MHz	FM	60 km	○
⑦ ガッサン		0.100 kW	94.6 MHz	FM	30 km	○
⑧ コングスイ		0.100 kW	93.2 MHz	FM	30 km	○
⑨ ワガドゥグ [カンボアンセン]	1979	6 kW(主機)	99.9 MHz	FM	0 km	故障中
		1 kW(副機)			30 km(推定)	500Wで減力運転中
⑩ ワガドゥグ [グンゲン]	1974	100 kW(主機)	0.747 MHz	中波	0 km	故障中
	1992	20 kW(副機)			100 km	○
⑪ ワガドゥグ [グンゲン]	1985	50 kW(主機)	4.815 MHz	短波	0 km	故障中 (※)
	1990	20 kW(副機)	7.230 MHz		0 km	
⑫ オロダラ		0.100 kW	91.2 MHz	FM	30 km	○
⑬ ブラ		0.250 kW	88.12 MHz	FM	30 km	○
⑭ ディエボウゴウ		0.5 kW	88.4 MHz	FM	40 km	○
⑮ オウアヒゴウヤ		6 kW	89.5 MHz	FM	80 km	○
⑯ ワガドゥグ [CAC]	1991	1 kW	96.6 MHz	FM	35(推定)	○
⑰ テンコドゴ						○

出所：主な出所は情報省で、故障状況・設置年等は2001年10月調査の際の聞き取りによる。

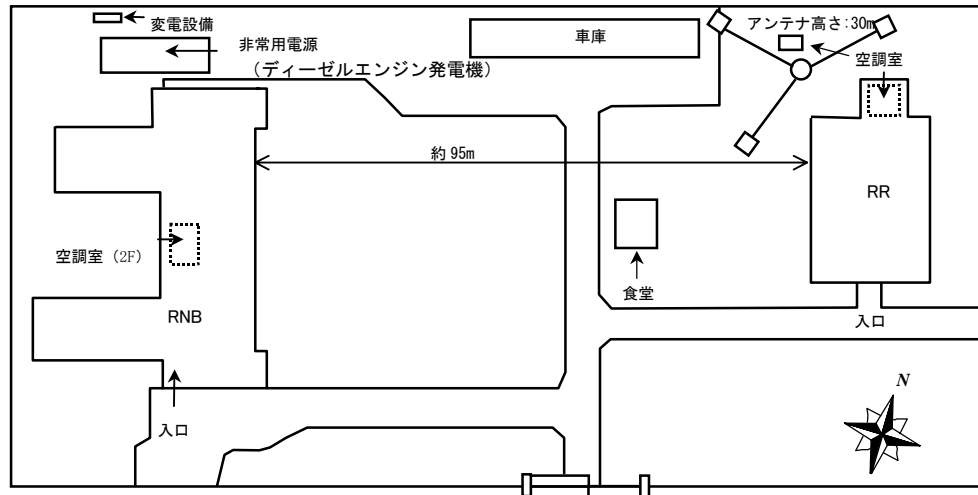
※ 短波放送は、現在装置故障により、運転を中止しているが、グンゲン放送センターにて100kW送信設備を建設中で、2002年初旬に完成予定である。

#### (7) 局舎

1959年に建設されたRNBの局舎は、コの字形に設計されているため、外側に面したスタジオが多く、局舎には開放された廊下や開閉可能な窓が多くあるため、居住性は良いが外気が進入しやすい構造となっている。このため遮音や防塵に対する対策が必要となるが既存の施設の状況から、ドア開閉部の調整や窓ガラス修理等の軽微な補修により対応が可能と考えられる。なお各スタジオの内装は非対象な作りとなっており、設計時にすでに音響対策が行われていたことがうかがえる。

一方、RRの局舎は1974年に建設され、近代的放送局の様相を呈しており、維持管理状況もほぼ良好である。またスタジオが建物中央に配置されており、各室内はアルミ製有孔ボード等、音響処理に適した内装が行われており遮音、防塵ともに配慮されている。

図2.1.4-5にRRとRNBの敷地図を示す。また、3-2-3基本設計図にRR局舎見取図およびRNB局舎見取図を示す。



出所：情報省

入口

図 2.1.4- 5 RR・RNB 敷地図

## 2-2 プロジェクト・サイトおよび周辺の状況

### 2-2-1 関連インフラの整備状況

#### (1) 電気

市内への配電は、国営電力会社である SONABEL が 15kV 配電網を整備し実施している。小規模な一般需要家には 3 相 380V もしくは単相 220V で配電されているが、放送局等の大口需要化へは 15kV 配電を行っている。配電網は本計画地のワガドゥグ市では全域に敷設されているが、市街地を外れた近郊の村落では未電化となっている。

なお、雨期（6～9 月）には雷雨が発生し、落雷により停電が、1 ヶ月に 10 回程度発生することがある。停電は数分で復旧することが多いが、数時間にも渡るものがしばしばある。このためワガドゥグ市では放送局等の重要な施設は、非常用発電設備を設置しているところが多い。また通常時においても、瞬時に 30% を越える異常な電圧変動が発生することがあり、電圧変動対策が必要である。

#### (2) 水道

市内の水道は国営の水道会社である ONEA 社により上下水道が整備されている。本計画地であるラジオ局敷地にも、上下水道網が整備されており、本計画の工事にも利用可能である。

#### (3) 電話

電話は、国営電話会社である ONATEL が市内電話回線と携帯電話サービスを行っている。また、民間の携帯電話会社として CELTEL および TELCEL があり、本計画地であるワガドゥグ市内での電話利用は容易である。またインターネットサービス会社も数社あり、市内電話回線を経由して利用が可能である。

#### (4) 新聞・雑誌等の文字情報

「ブ」国で出版されている主な新聞、雑誌等の文字情報の発行は、情報省が管理している。発行形態は日刊、週刊、月刊、または 3 ヶ月ごとの季刊紙等があるが、10 ページ程度の一般的なニュースを紹介する週刊紙が多い。日刊紙の発行部数は全紙あわせて 1 万 5 千部～2 万部程度であり、人口に対して 500 分の 1 以下となっており非常に少ない。図 2.2.1-1 に「ブ」国新聞・雑誌の発行数、図 2.2.1-2 に「ブ」国新聞・雑誌の内容を示す。また、表 2.2.1-1 に「ブ」国で発行されている新聞雑誌例を示す。

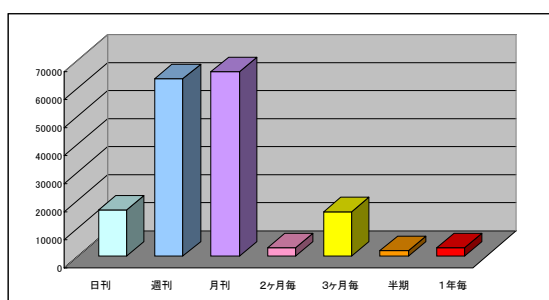


図 2.2.1-1 「ブ」国新聞・雑誌の発行数

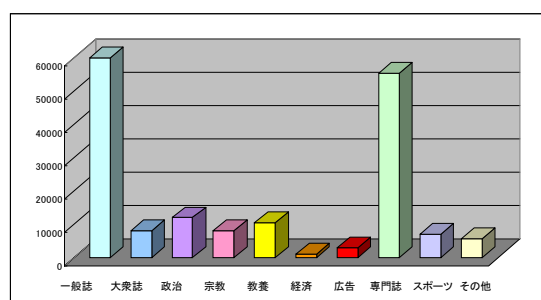


図 2.2.1-2 「ブ」国新聞・雑誌の内容

表 2.2.1- 1 「ブ」国の新聞・雑誌の出版状況の例

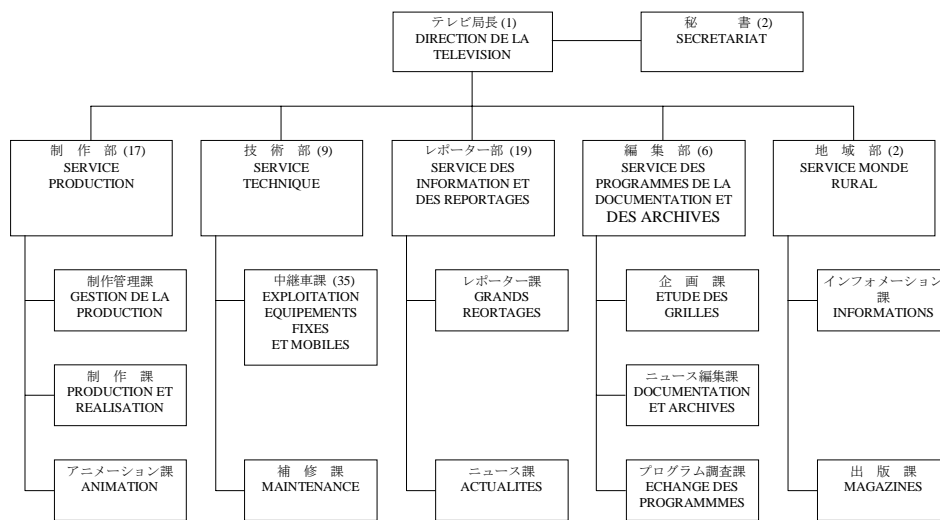
タイトル	出版日	内 容	発行箇所	ページ	発行数
1) Sidwaya	日 刊	一般誌	Ministre en charge de la Communication	16	3000
2) L'Observateur Paalga	"	"	Edouard Ouedraogo	24	5000
3) L'Observateur Dimanche	週 刊	"	"	20	4000
4) Le Pays	日 刊	"	Boureima Sigue	16	3000
5) Le Journal du Soir	"	"	Issa Tapsoba	12	3000 a 5000
6) Bulletin Quotidien	"	"	Ministre en charge de la Communication	12	500
7) Kibare	"	"	Feu Kabore D. Boniface	Ne parait plus	
8) Sidwaya Hebdo	週 刊	"	Ministre en charge de la Communication	32	2000 a 3000
9) Sidwaya Sport	"	"	"		
10) Evasion	"	"	Boureima Sigue	20	2000
11) L'Independant	"	政 治	Norbert Zongo	12	8000 a 12000
12) Le Journal du Jeudi	"	大衆誌	Diallo Boubacar	12	6000 a 8000
13) Big Z Hebdo	"	スポーツ	Zougrana Ben Idriss	12	3000
14) L'Intrus toujours	"	大衆誌	Bazie Jean Hubert	12	Ne parait plus
15) Carrefour Africain	"	一般誌	Ministre en charge de la Communication	32	Ne parait plus
16) Le Matin	"	"	Bonzi Dofinita	12	3000
17) L'Ouragan	"	芸 能	Konate Lohe Issa	12	1500
18) Le Jeune Detective	"	—	Bonzi Dafinita Florent	12	1000
19) La Clef	"	一般誌	Ky Satumin	12	3000
20) Sport Plus	"	スポーツ	Mme Sanou	12	1000
21) Sport 2000	"	"	M. Baky Joachim	12	3000
22) L'Express du Faso	日 刊	一般誌			
23) Tam Tam	週 刊	"	Zanga Issouf Ouattara	12	1500 (Ne parait plus)
24) L'Opinion	"	"	Lengani Issaka (Tel. 30 89 49)	12	5000
25) La Nation Libre	"	"	Kyalbnboue Bayili	Ne parait plus	
26) Regard		新 刊	Feu Patrick G. Ilboudo	24	2000
27) L'Abeille du Faso	"	一般誌	Feu Ky Raphael	12	1500
28) Wekre	"		Dicko Abdoulaye	Ne parait plus	
29) Echo du Burkina	"	一般誌	Kanazoe Lassane	12	1500
30) Media coeur international	"	専門誌	Ouedraogo Gilbert	Ne parait plus	
31) Sarbale	"	大衆誌	Bondaone Doma Paul	Ne parait plus	
32) Yirmoaga	"	"	Sawadogo Raya Benjamin	Ne parait plus	
33) Le Petit Enqueteur	"	専門誌	Feu Nabolet John Oumar	Ne parait plus	
34) L'Echo de la semaine	"	一般誌	Poda Flavien	Ne parait plus	
35) Le Messenger	"	宗 教	Pasteur Mamadou Karambin	12	1000
36) Bendre	"	一般誌	Sy Moumouni Cheriff	12	1500
37) Griot du Faso	月 刊	広 告	Louis Yameogo (Zp) Tel. 31 54 57	16	3000
38) Le Chomeur International	"	一般誌	Hassane Baadhio	Ne parait plus	
39) L'Hebdomadaire du Burkina	週 刊	"	Zephirin Kpoda / FGZ Trading Tel. 30 08 46	12	3000
40) Sport Miroir	月 刊	スポーツ	Zongo Amado Junior	Ne parait plus	
41) Femmes solitaires	"	一般誌	Rosine Coulibaly	Ne parait plus	
42) Racines	"	教 養	Ouedraogo Salifou	40	3000

出所：情報省



(5) テレビ放送

「ブ」国のテレビ番組制作、放送は、国营テレビ放送局（RTB）が実施しており、同局は国营ラジオ放送（RNB）と同じ、国营ラジオテレビ総局に属している。局舎はRNBとは別の建物で、情報省本省に隣接している。技術的にはフランス国の支援を受けており、ボボデュラッソ等県庁都市が放送を行っているが、出力は小さく受信範囲は15～50 kmで、全国カバレッジは30%程度である。情報省によればまたテレビ自体が高価であることから、テレビ放送は普及していないとの事である。図 2.2.1-3 に国营テレビ局の組織図を、表 2.2.1-2 に「ブ」国テレビ放送網を示す。また図 2.2.1-4 にテレビ放送網の全国カバレッジを示す。



出所：国营ラジオ・テレビ総局

図 2.2.1-3 国营テレビ局組織図

表 2.2.1-2 「ブ」国のテレビ放送網

地名	設置年	出力 (kW)	受信範囲 (km)
① バンフォラ (BANFORA)	1990	100	15
② ボボデュラッソ (BOBO DIOLASSO)	1998	1000	50
③ ボロモ (BOROMO)	1990	500	30
④ デドウゴ (DEDOUGOU)	1998	1000	50
⑤ ディエボウゴウ (DIEBOUGOU)	1998	100	15
⑥ ドーリ (DORI)	1998	1000	50
⑦ ファダングルマ (FADA N'GOURMA)	1998	1000	50
⑧ ガオウア (GAOUA)	1998	100	15
⑨ カヤ (KAYA)	1998	1000	50
⑩ コウドウゴ (KOUDOUGOU)	1998	1000	50
⑪ コウペラ (KOUPELA)	1995	500	30
⑫ ワガドゥグ (OUAGADOUGOU)	1997	2000	70
⑬ オウアヒゴウヤ (OUAHIGOUYA)	1998	1000	50
⑭ パマ (PAMA)	1998	500	30
⑮ ポー (PO)	1990	100	15
⑯ テンコドゴ (TENKODOGO)	1998	1000	50
⑰ トウガン (TOUGAN)	1998	1000	50
⑱ ヤコ (YAKO)	1998	1000	50

出所：情報省、国营ラジオテレビ総局

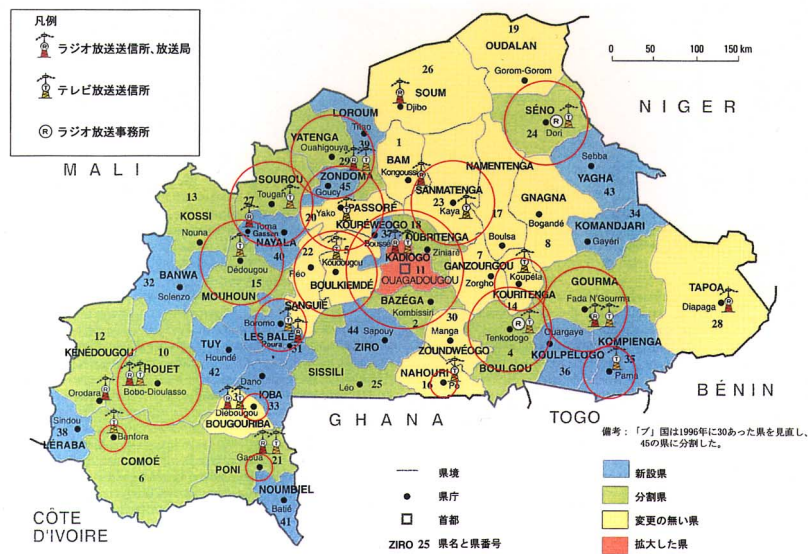


図 2.2.1-4 テレビ放送網の全国カバレッジ

図 2.2.1-4 テレビ放送網の全国カバレッジ

## 2-2-2 自然条件

### (1) 一般状況

本計画地は、北緯 12.3 度、西経 1.5 度、標高 300m から 400m に位置する「ブ」国の首都ワガドゥグ市内にある。同市はほぼ平坦な地形で形成されており、本計画地 (RR と RNB) の敷地も起伏はない。地質はラテライトである。

### (2) 気象条件

本計画地であるワガドゥグ市は、熱帯性気候にあり年間平均気温は約 27.1℃ であるが、乾期 (10 月～5 月) には 40℃ を越えることもある。サハラ乾燥した気候であるため降雨は少なく、年間 700mm 程度であるが、雨期 (6 月～9 月) には雷雨が発生し、落雷により停電が頻発する。

### (3) 砂塵

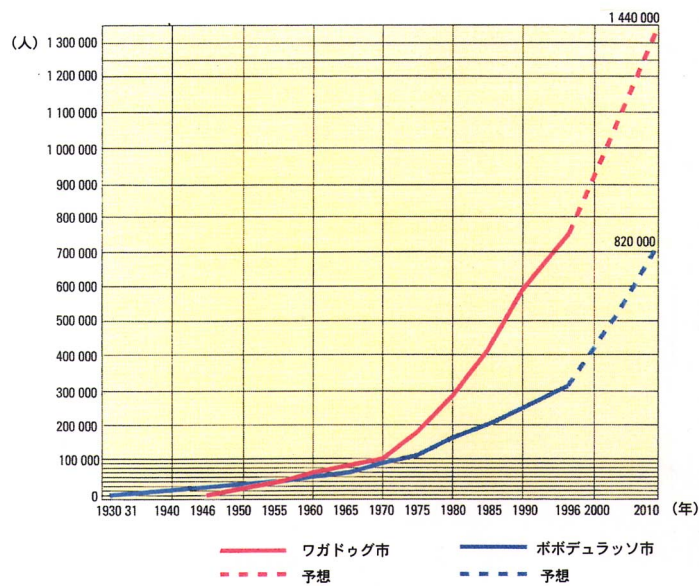
本計画地は、サハラ南部に位置しているが、ハムシーン (砂嵐) の直接的な被害は少ない。しかしながら降雨量が少ないため、砂埃は多く、市内でも細かい砂埃にまみれることがある。

## 2-2-3 その他 (人口、家屋数、住民生活状況等)

産業が集中するワガドゥグ市やホボデュラソン市等の、主要都市は 19 世紀より金、塩、ナッツの貿易で栄えていたが、近年は地方生活の困窮と収入の格差から両都市への人口集中が加速しており、近年の両都市への人口増加率は著しく (1993 年で 8.4%)、社会的な問題となっている。また都市への集中は若年層が多いため、都市部の人口分布では 80% が 35 歳以下、10～35 歳の年齢は 50% に達している。このため地方部の生活改善が望まれている。

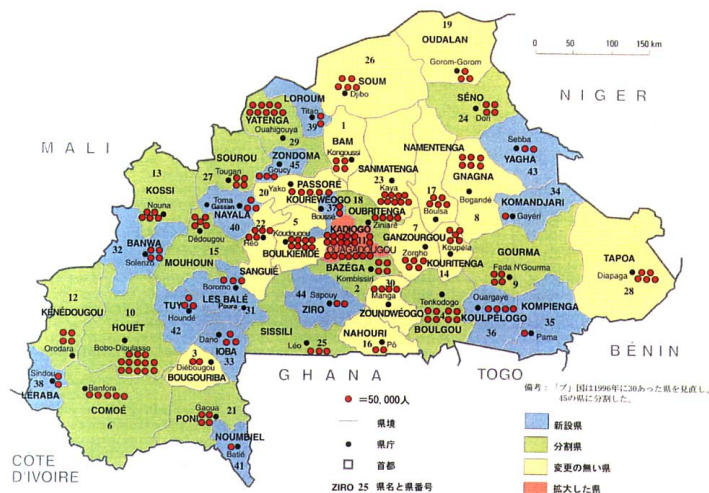
なお、「ブ」国は問題解決のため、地方振興を目的とした行政区分の改革を1996年に行っており、全国30の県（プロバンス）を45の県に細分化した。また、同時に首都ワガドゥグ市を含むカディオゴ県を拡大する等人口集中化への対応を行っている。図2.2.3-1にワガドゥグ市とボボデュラソ市の人口予測を示す。

なお、1996年の統計資料によると全国人口は約10,313,000人で、首都ワガドゥグ市のあるカディオゴ県が約942,000人、第二の都市ボボデュラソ市を含むハウエット県が約672,000人となっている。同統計資料による人口分布を図2.2.3-2に示す。



出所：JEUNE AFRIQUE ATLASES 1998

図 2.2.3- 1 ワガドゥグ市とボボデュラソ市の人口集中状況(1996年の推定)



出所：1996年人口統計資料

図 2.2.3- 2 「ブ」国の人口分布状況